

# 何を教えるか

——富山医科薬科大学の英語教育について——

藤 本 正 文

(summary)

## What Has to Be Taught?: English Education as Desired for TMPU

English education in this university (TMPU) as part of its 'Goal-Oriented Education' should aim to provide students with skills that will be needed when they use English within their respective domains of specialty. The domains being scientific, qualities such as abstractness, logicity, precision, and exactness are considered necessary in our language education, while from this, it does not follow that materials we use in classes ought to be especially related to their respective fields. With academic knowledge primarily conveyed by written words, practice in reading is of primary importance. The method of intensive reading seems preferable, where grammatical explanations can be of great help to students. In addition, this reading practice will help to build foundations for all other facets of verbal communication.

When we write English, what counts seems to be the ability to know if it is English, to know if what we are writing is like what a native writer of English would be writing. The accumulation of the experience of reading is perhaps the only way of enhancing this ability. When we listen to English, our comprehension is undeniably dependent on a stock of knowledge we have of English words and expressions, but far less on skills we have in recognizing on a physical basis the sounds there being involved. Hence the need of practice in reading. As regards the speaking of English, too, expressions necessary for doing this can be learned from our reading, and with efficiency at that. We had better not lay too much emphasis on firsthand experience in conversation. Lastly, this writer wants himself understood as basically a believer in the pursuit of 'practicality' in English study, who, however, considers that our program here should have one distinctive characteristic which is really suited to this particular university. (Masafumi Fujimoto)

### 1

はじめに 本学のいわゆる「一貫教育」の体制のもとで、われわれの英語教育がもつべきである目標は何か。それは医学（看護学）、薬学を将来の専門として選んでいる学生たちに、そのそ

それぞれの専門の領域で英語を使うのに必要になる語学力を授けることであろう。これだけでもはや欠落はないか、と言われれば、それらはおそらくありうる。しかし話をいささかでも別方面に広げると、それと「一貫」とはどのように関係するか、という複雑な、実益の不明瞭な議論が必要になる。紙幅の節約と精力の集中のために、いまはひたすら問題を単純化しておく。以下にこの前提のもとで、標題の論点について私個人の考えを述べたい。

この事柄をめぐる英語学科目の教官各位には、言うまでもなくそれぞれの考え方がおありである。しかしわれわれの英語教育はこの大学のもつ特定の教育体制、教育方針に見合う（と私が考える）、ひとつの明瞭な特徴をもつことが望ましいのではないか。これを主張することが小論の内容である。そして同時に小論は、私が日ごろ行なっていること、行っていないことを正当化するための、いくぶん自己弁護の性質を持つものにもなるであろう。なお、教育にはこの他にも重要な一面があるが、いまはそれを顧みずにこのことだけを取り扱っておく。

医学薬学の英語 私はこれらの学問を知らない。しかし私が想像するところ、そこではやはり抽象的、思弁的な、論理操作的な傾向のある英語の知識が必要になるのではないか。さらにそこでは、サイエンスのもつ緻密さ、正確さといった性質を反映する英語の使い方が要求されるのではないだろうか。そしてもしも以上が間違いでないならば、本大学の英語教育は、何よりもまずこれらの点に配慮するべきであることになる。

そう思うのであれば、将来の専門分野に関係のある英語を教えるのがよいのではないかと問われるに相違ない。それがもっとも実際的である、と。ひとまず当然の疑問のように見える。しかしこれは文系の専門においてすらすでに言えるのであるが、かりにわれわれが何かの専門的内容の英文を読んでいるときは、それは事実上、英語を読んでいるのではない。専門の論理を読んでいるのである。そこでは英語そのものを正面から考えないで、それとは別の方面から知恵を働かせればよい。その方がはるかに進行が容易であるし、はるかに安全確実である。この意味で専門の論理は、あたかも足許の不確かな人たちのすがるキャスターのついた歩行者（病院のロビーなどで見られる）に似ている。しかるに英語の学習にとって、これは不必要な存在であって、かえってスポイルの要因になる。ない方がよいと思わざるをえない。すなわちこの理由で、われわれの英語の授業は何かの特定の専門に縛られるべきでないと考える。なおついでながら、いわゆるテクニカルタームをはじめとするそれぞれの専門領域での頻出表現は、その専門の先生のご指導があつてのみ適切に習得されるのではないだろうか（想像であるが）。

リーディング(1) 知識や知見は基本的に文字を通じて媒介される。したがって大学の英語教育は、学生の英文読解力の養成に最大の力を注ぐべきである。しかもこの医科薬科大学はいわゆるレジャーランド型、社交クラブ型の大学ではない。したがってこの方針の教育は、まさにこの大学においてとりわけ必要になることである。

学生は受験勉強によって英語がよく読めるようになってきているかという点、これが絶対にそうはいえない。おおむね彼らは発音が少し上手で、聴き取りが少し上手で、読む力が著しく劣る。かっ

て日本の学生の英語は読むことは出来るがそれ以外のことは出来ない、という通念があった。いまやそれは完全に過去のものになっているように見える。

今更いうまでもないが、これはわが国の学校教育に重大な方向転換が行われたためだ。口頭コミュニケーション能力の養成、ということが国を挙げての大目標にされた。そしてたとえば中学の1年生にI am よりも I'm と書け、you are よりも you're と書けと教える。書かなければテストで×にする。(おそらく) こうしておくで聞き取りのときにいくぶんか有利であるから。それで学年が進むと、生徒に難しい高等な単語を見せない。覚えさせない。この点は嚴重に、徹底的に配慮する。(おそらく) 会話の場面ではそれを使う必要がないから。こういう考え方の教育が国中で行われてきた結果、いまや日本人は世界各地でお買い物上手に出来る。現地のパーティに出るのも怖くない。大変立派なことかもしれないが、ただそのかわり英語の本は読めなくなっている。はたしてこの方がよかったのかどうか。いや世の中の有象無象はどうでも、この大学の学生がこちらの方がよいのか。よい筈がないであろう。

リーディング(2) ちなみに私は授業で主として論説的な傾向の文献(ときにフィクション)を用い、多読速読ではなくて、いわゆる精読の方法をとっている。出来るだけ詳しく、気のつくかぎりのことを説明している。このようなテキストの読み方こそが、すでに記したようなサイエンスという専門の性質によく適合するものであるつもりだ。英文に和訳をつけているが、これはこの方法が英文を解説するもっとも効率の良い手段だからである。訳を言うことで意味がたやすく伝えられるし、同時に構文を理解させるのにも役立つ。この方法が使える点が、われわれ日本人教師が外国人教師よりもただ一つ恵まれているところである。

比較的文法のことをよく言う方であると思うが、これはただ文章を分かりやすく説明しようと試みているにすぎない。およそ事柄を説明するには、説明をする側とされる側の間に、ある一定の概念とその概念を表わす言葉が共有されていなければならない。英語の授業では、それらがまさに文法と文法用語なのである。よくテレビなどで文法教育を反実用的であるように悪しざまに言う議論を聞くが、それは素朴な性質の認識不足である。いわゆる学校文法(言語科学としての文法ではない)は実用主義的であって、これはわれわれが英語や英文を理解する手助けになるように考えて作られているのである。

なお、私は授業でリーディング以外のことは行っていない。しかし英文を読むことは、同時に英語の他の方面の運用のための基礎を作ることに相当する。読む訓練を抜きにして他のいろいろのことを企てるのは、軟弱な土壌の上に家を建てるのに似ている。この考え方はわが国の大学の英語教官の間ではなんら珍しいものではないが、私自身はとりわけ強くそう思っている方かもしれない。それで以下は少し長くなるし、相当に口幅ったいところもあるが、各項目でこのことについて考えを述べておきたい。話が迂遠にすぎる、と言われれば、語学の学習は本質的にそういうものである、と答えざるをえないのであろう。

## 2

ライティング 英文を書くときは（とりわけ重要な文章を書くときは）、われわれはかならず辞書を繰りながら書くべきである。ちなみに大学受験ではこれが許されないために、受験のための勉強ではいろいろと表現の仕方を覚えこむことが大きな仕事になる。しかしたとえば科学者が科学の事柄を英語で書く場合には、手もとの辞書、参考書を見てそこから表現を選ぶことができる。この違いは重要である。決定的に重要ではないだろうか。よって私の考えでは、医学（看護学）、薬学の学生にとって必要なことは次のことである。

すなわち英文を書いたときに、自分のセンテンスに対する自己批判の力があるようになること。つまり辞書からの表現の選択とそれらの配列が、英文として正常であるか否か、ノーマルな英文のそれに十分に似ているか否か、を考える力をもつことである。そしてこの力は、ないしこの感覚は、（当然ながら）英米の人々の書いた英文を読むことによって得られる。その積み重ねによる他はない。それ以外の方法では獲得することが困難であろう。

以上は単純な理屈であると思われる。ただし、普段から英語を読むといえば面妖なテクニカル英語を読むことでしかない、というこの大学の先生方は、なかなか実感をお持ちになりにくいかもしれないが。また理屈はとにかくとしても、世の英作文の達人である人はかならず「読む」ことの効用を言われる。そして私程度の学力しかない者でも、感覚しかない者でも、やはりそれに違いないだろうと思うのである。

リスニング まず何よりも、文字で見分らないものが音声を聞いて分かる筈はない、ということをお忘るべきでない。いくら音声を物理的に聞き分けることが出来ても、その当の単語や表現を知らないのでは何にもならない。もちろん音声を聞く訓練は重要なことであるが、やはりそれとならんで、英文を読む訓練が必要になる道理である。たとえば英字新聞の政治面、社会面（一番やさしい）に苦心惨憺する状態にある学生が、つまり本学に入学する学生の9割5分が、ニュースの英語（一番やさしい）が聞けるようになるのは至難の技であろう。彼らがまず何をしなければならぬかは自明である。それで私は講読のテキストとして、しばしば新聞の記事を抜粋したものを使うことにしてきた。

ただし、聴き取りが不十分であってもある程度のコミュニケーションはできる。この点は私などが常に経験していることであるが、これはやはり言語外的な、その場面の状況が手助けになるからである。そしてこの理由で、聴き取りの練習としては音声テープを聴く方法は純度が高い。生身の英米人と対座しているよりもむしろ効率的な面があるといえよう。授業の中で音声テープ、ビデオテープを大量に聴かせるのはとてもよいことであると思う。ただし私自身が行なっていることではないけれども。

スピーキング これも当たり前だが、知らない英語は口にだせない。記憶にインプットしていないものはアウトプットできない。これも私が困っている点である。しかし英語を知ろうとする

場合には、やはり英文を文字で見ることがもっとも効果的であると思われる。読むだけでは話せるようにならないが、読むことを遠ざけているかぎり、これも決して満足に話せるようにならない。私などはこのように思う。日本の学生が英米の文盲の人たちに近づく努力をするのは愚かなことであろう。

現在本学には英米人の非常勤講師の担当する英会話的なクラスが非常に多いが、私個人としては、これはあまりにも多すぎている。たしかに会話はある程度場数を踏むことも必要であろうが、それは必要なことの中の小さな一部分ではないのか。しかも語学嫌いがあまりひたすら場数を踏んでいると、そのうちに英会話はとにかく音声を発すればよいのだ、と気づく。そうすると、なにも苦心して言葉を覚えなくても大丈夫、と思うようになる。実はこう思っている方はとりわけこの大学には数限りなくおいでになる筈。(偉観であろう。)つまり自然にそうなるのだから、わざわざ授業でやる必要はない。実際上ない。課外活動にすれば性質は違って来る。すなわちこの理由で、現行のカリキュラム——とりわけ薬学部のそれ——にはかなり再考の余地があると思うのである。

ついでに 実は私の場合、英語に入ったのはむしろ英会話、英作文からであった。20歳代に某有名会社に勤めていてこれらを学ぶことが比較的身近な要請になっていたからで、センテンスの暗誦、テレビ、ラジオの講座、種々の音声教材、英米人のクラス、と大抵のことは一通り行なった(ような気がする)。このときの成果は英検1級と運輸省の通訳案内業試験に合格したことである(注を参照)。ただしその当時は英検の1級は著しく易しかった。今日では英検に準1級が設けられているが、それよりもさらに易しかったかもしれない。私が英語というものを本当に勉強したのは、その後の30歳代においてである。

私には海外留学の経験がないし、しかも恥ずべきことに日本国の国境をただの一步も出たことがない者なので、話のレベルはこのように甚だしく低い。しかしいま私が言おうとしているのは次の点である。すなわち私はやはり、英語の学習は根本的に実用志向的でなければならないと思っている。自分のやらない(やったことがない)ことは学生もやる必要がない、というような狭い考えではないつもりだ。けれどもいまは、この大学にもっともふさわしいプログラムは何か、を問題にしている。この点をぜひご理解願いたい。以上、いろいろと述べてたが、実は日ごろ私自身の授業は非常に不満足なものである。一切について、どうぞ存分にご批判をいただきたい。(原稿提出98年1月7日)

注 教官公募で私のとときの履歴書様式にはこれを記入できる欄がなかった。〈実用英語技能検定試験1級〉日本英語検定協会 65-5 第1234号、1966年3月26日付。(試験の実施は65年の後期。「英検」は63年後期に第1回があり、このときは通算で第5回目にあたった。1級の難度の上昇は、おそらく帰国子女が大量に存在するようになったことと関係があるのではないかと。)〈通訳案内業試験(英語)〉運輸大臣第3539号、1965年9月8日付。(これは大戦前から行われていたという試験で、国家試験だったのであ

る程度権威らしいものがあつた。現在は実施が民間の団体に移管されている。なお、案内というのは外国からの観光旅行者を案内するということ。) 教育論は当然ながら教師論の眼をもって読まれるであらう。あえて以上を付け加えておきたい。